

【大会趣旨文】

日本近代文学が他言語と接触するとき、必然的に「近代」という本来ならば普遍的な概念と、「日本近代」という特殊性の衝突が起きるだろう。欧米主体の日本研究ではその特殊性に注目が集まりがちだったが、「世界文学」という分析概念の浸透により、限定された地域の文学という既存の枠組みから日本文学が解放されたことで、どのような変動が生じたのだろうか。日本近代文学研究の現在地を、翻訳を視座として考えてみたい。

欧米圏における日本文学の翻訳は、主に欧米圏への紹介として進められてきた。オリエンタリズム的なまなざしで日本をみる欧米圏の欲望に対し、お土産として縮緬本が用いられたり、末松謙澄による『源氏物語』の翻訳が行われたりしたことなどに、脱亜入欧をもくろむ日本の欲望との交差をみることができる。

他方、日本文学の翻訳には帝国日本のアジア侵略に関わる側面も存在する。欧米圏ではイデオロギーを媒介として、同時代文学としてのプロレタリア文学の翻訳・紹介が行われたが、植民地朝鮮にもプロレタリア文学・文化運動が持ち込まれている。また、プロパガンダとして火野葦平『麦と兵隊』が各国語に翻訳がなされるなど、帝国の欲望の象徴としての翻訳もある。その一方、発禁となった石川達三『生きてゐる兵隊』が中国語訳により日本軍の非道を世界的に告発するものともなった。さらに交戦国においては軍事戦略として日本研究が実施されるなど、翻訳と研究、支配の権力関係への再考が求められよう。アメリカの海軍日本語学校で日本語を学んだ D・キーンや E・サイデンステッカーらの存在は、戦後クノッッフ社を舞台とした三島由紀夫、川端康成らの翻訳事業に繋がる。フォード財団を基盤として東西冷戦を背景とした翻訳事業は、戦後における地域研究のひとつとしての日本研究が世界的に推進されるきっかけとなった。

1980 年代以降、村上春樹が世界的なブームになったことで、日本という国家を前提としない「世界文学」としての研究的視座が見出されるようになった。2002 年に創設された文化庁主催の「現代日本文学の翻訳・普及事業」(Japanese Literature Publishing Project) や国際交流基金による出版助成先からは、アジア、欧州、中東、アフリカ等への日本文学の翻訳状況が看取でき、日本研究と共に翻訳への資金援助がなされている。同時に、経済産業省のクールジャパンに代表されるソフトパワーとしてのマンガ・アニメといった大衆文化人気は、濃淡はあるものの、現在の日本研究でも根強いものだ。そして、近年では英語圏における村田沙耶香や川上未映子など、女性作家作品の翻訳の躍進がある。柳美里『JR 上野駅公園口』、多和田葉子『献灯使』の翻訳が全米図書賞を受賞したことは記憶に新しく、小川洋子も候補に挙がった。文化研究への目配りをより意識した Routledge Handbook of Modern Japanese Literature (2016) のように、キーンの Dawn to the West に代わる新たな入門書も刊行されるなど、研究の転換も顕著だ。こうした翻訳や研究の転換について、英語帝国主義に陥らない視点から問う必要がある。本特集では、日本近代文学／日本近代文学研究をトランスナショナルな視点から捉え直してみたい。

5.31

13:30～
[SAT]

開場は午後1時より

《開会の辞》久米依子

《特集》海外における日本近代文学研究と翻訳の現在

●講演

瀬戸智子 越境・連帯・独自性—動いて揺らぐ「日本研究／Japanese Studies」

●発表

グレゴリー・ケズナジャット ジャンルとしての「Japanese Literature」—英語圏における日本文学の変遷—

ロウリ・エステル・パサリブ インドネシアにおける日本文学の受容：研究及び翻訳を中心にして

●質疑応答、ディスカッション

ディスカッサント：鈴木貴宇

6.1

10:00～
[SUN]

開場は午前9時30分より

【第一会場】

《研究発表》

ビアンコ・アンドレア 〈温泉文学〉の観点から捉えた岸田國士『浅間山』—ツーリズムとシンボリズムの両義性

青木怜依奈 牧野信一「酒盗人」論—哲学者とソフィストの相違をめぐって—

川上優芽 北原白秋『満洲地圖』論—時代錯誤とオノマトペの行方

《パネル発表》

柿原和宏／花岡敬太郎／大橋崇行／（ディスカッサント：小松史生子）

核表象の〈翻訳〉と日本ポップカルチャー

【第二会場】

《研究発表》

野間颯 近代短歌と〈事実〉—中河與一の「写生」短歌批判と石原純の相関性に注目して—

吉見瑠威 英訳に堪えない小林秀雄—柄谷行人らの指摘からみる小林と翻訳の問題—

別當奏 微細なものの革命—花田清輝と安部公房の「量子力学」

呂娜 穀堂をはじめとする儒者や文人に対する荷風の考え方—『下谷叢話』を中心に

《パネル発表》

金昇淵／魏韻典／長嶺裕貴

〈日本語〉で共有される文学と翻訳の同時代的〈読み〉

【第三会場】

《研究発表》

林圭介 男のいない女たち—村上春樹『夏帆』論—

サベレジナヤ・オリガ 世界文学としての日本語文学—リービ英雄・水村美苗のバイリンガル性を中心に

袁嘉孜 日本への眼差しに込めて—多和田葉子「球形時間」を中心として

《閉会の辞》久米依子

二〇二五年度 日本近代文学学会春季大会 国際研究集会

《特集》
海外における
日本近代文学研究と
翻訳の現在